

猫

厳しい現状

猫の殺処分は、犬ほど減っていません。

①法令の定めがなく実態が把握しづらいこと

②無責任に猫を増やす住民がいること

③持込頭数が多く譲渡が追い付いていないこと

などが要因です。

これらは殺処分ゼロへの課題であると同時に、

猫のトラブルの根深さを物語っています。

奪われるために 生まれる命

福岡県では年間約3000頭の子猫が殺処分されています。殺処分される子猫の83%は所有者不明の猫、つまり野良猫です。

そのほとんどは、地域で生まれた離乳前の子猫で、生まれて一カ月も経たないうちに保健所などに引き取られ、殺処分されています。

その不幸な現実を、まるで子猫が命を奪われるために生まれてきたかのような錯覚に陥るほどです。

野良猫にエサを与える だけの行為の問題点

地域で生まれた野良猫の子猫の一部は、食住環境が整った場所で生き延び、鳴き声や糞尿などで地域に迷惑をかけることもあります。そして、これらの猫が成猫となれば、さらに子猫を生むのです。

まさに負の連鎖。そして、その連鎖に拍車をかけているのは、ルールなく野良猫にエサを与える人の存在です。

エサをもらい栄養状態が良くなることで、地域で生まれる野良猫はますます増えてい

きます。増えた猫は近隣からの苦情により保健所に収容されるほか、交通事故(※)でも命が奪われています。

もし、現在、飼うつもりがないのに野良猫にエサをあげているなら、少し手を止めて考えてください。そのエサを与えることで、命を奪われる不幸な子猫はどんどん増えていきます。

野良猫にエサを与えるならば、猫に避妊去勢手術を施し、飼い猫として家に迎え入れるか、地域猫として育てるなどの選択が必要ですよ。

※平成27年度、交通事故などにより桂川町内で回収された犬・猫の死体数は51頭。同期間に桂川町内で保健所に回収された捨て犬・捨て猫などの数は24頭。殺処分の数に目が行きがちですが、増えた猫の中には、交通事故やカラスなどの外敵に襲われて死ぬ個体も多いのです。

もし野良猫にエサを与えているなら、
命を奪われる不幸な猫を、
これ以上増やさないことについて考えてください。

